

特別支援教育の知見をいかした学校経営XI
ー子どもたちの作品から発達の状況を読み取り指導に生かす①ー

A Study on the School Management Based on the Knowledge of
Special Needs EducationXI :
Understanding the Developmental Situation from Children's Works and Applying it to
Teaching①

百瀬 和夫*
Kazuo MOMOSE

抄 録

毎年、多くの学校園からの依頼を受け、教室巡回指導に出向かせていただいている。困っている子どもたちは、授業中に座っていられなかったり、教室を飛び出したり、すぐに友だちに手をだしてしまったり等々、様々な形でその困っているところを表出している。

その状況に対して、どのようにそれらの子どもたちと関わり、指導・支援すればよいのかの糸口を見つけるために、教室にある観察記録や絵や習字などの作品から、子どもたちがどのような点で困っているのかなどプロフィールの読み取りを行っている。

教室巡回後の担任の先生との情報交換では「普段見ていないのに、なぜそんなことが見えるんですか？」とか「どうしたら、わかるようになりますか？」などと尋ねられることも多い。

その一つの回答として、Ⅱ章では、絵や文字などから子どもたちのプロフィールを読み取る基本的な理念として、ITPA 理論や感覚統合の視点を紹介した。さらに、Ⅲ章では 0 歳児～3 歳児までの絵とそこからの読み取りの事例を提示した。

しかし、読み取りをすることそのものが目的ではない。本当の目的はこのような手法を通して子どもたち一人ひとりに応じた的確な関わり方ができるようになったり、指導・支援の仕方を工夫できるようになったりすることにある。そしてそれが、より良い学級集団づくりに結びついてくれることを心より願っている。

I はじめに

教室巡回指導で学校園に出向く際には、そのクラスの座席表と共に、子どもたち一人ひとりの名前がわかるようにして絵や観察記録、書道などの作品を教室の後ろや側面に掲示していただくようお願いしている。

それは、子どもたちの作品から一人ひとりの発達や成長の様子やメンタルの状況、困っているところなどのプロフィールを読み取ることができるからだ。

特に幼い子どもたちは衝動性であったり、多動であったり、自閉的であったり、自分自身の困っているところを素直に絵や文字に表出してくれている。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

その際、よく先生方から「普段見ておられないのに、なぜそんなことが見えるんですか？」とか「どうしたら、わかるようになりますか？」などと尋ねられることも多い。

今回、いくつかの事例を挙げつつ、子どもたちの姿勢や姿からだけではなく、作品からプロフィールを読み取るための基本的な考え方や読み解くポイントについて述べてみたい。

そしてそのことが、より一層子どもたち一人ひとりに合った適切な指導につながり、授業の改善やより良い学級づくりにつながってほしいと願っている。

Ⅱ 絵や文字などから子どもたちのプロフィールを読み取る基本的な理念

子どもたちの作品を読み取るにあたって、ただ当てずっぽうで話しているのではなく、プロフィールを読み取るための基本となる理念や理論がある。

本章において、事例と共にそのいくつかを紹介したい。

1. ITPA 理論

言語学習能力診断検査（ITPA：Illinois Test of Psycholinguistic Abilities）とは、イリノイ大学のカークによって開発された子どもの言語学習能力を測定する検査であり、言語学習能力を聴覚-音声、視覚-運動の2つの回路、受容・連合・表出の3つの過程で捉えている。

つまり、五感によって「入力」された情報は、脳で「統合」され、文字を書く、絵を描く、話すなどの形で「出力」されている。

この点に着目すると、その一連の回路の中のどこかで、何らかの困っているところがあれば、出力された子どもたちの作品のどこかにそれが表出されているという可能性がありそしてそのサインを読み解くことで子ども理解の一助にすることができる。

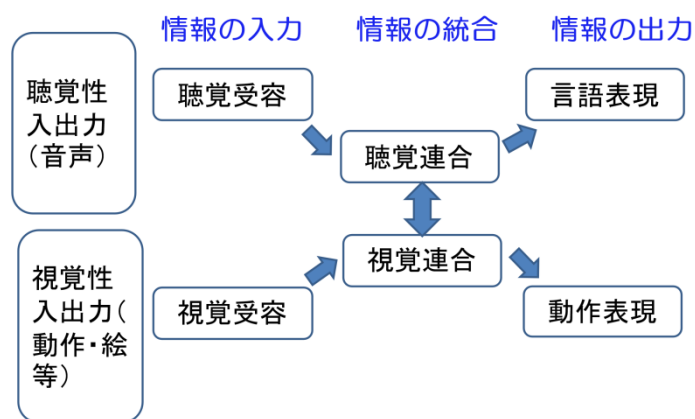


図1) ITPAの基本概念図

1.1 「読む」と「書く」

次ページの子どものノートは、神戸市など阪神間の学校でよく使われている主に漢字を練習するための百字帳である。

自由勉強としてこのような乱雑に見える文字ではあるが、健気に漢字の練習をしてくるこの子どもをどのように指導すればよいのかと、悩んだ担任の先生から相談を受けた時のノートだ。

さて、入力される情報の中で「読む」は目の前の文字と視覚情報と発声という出力が明確に対応しているのだが、「書く」はそれが十分に意識されていない場合が多い。

例えば、「視写」という学習活動において、一連の情報の流れを考えると、黒板の板書をノートに「視写」をする場合、板書という「視覚情報」があり、それを入力して脳でその情報を統合して、ノートに書くという形で出力するという一連の回路が使われる。

次に「聴写」の場合は、聴くという「聴覚情報」を入力して脳でその情報を統合して、ノートに書くという形で出力するという一連の回路が使われる。

次ページの子どもの場合、まずはお手本となる視覚情報は何であって、それをどのように見ていたのかを把握した上で丁寧に指導する必要がある。

その上で、文字の練習をしたときに、視覚情報としての入力に躓きがあつてうまく見えていないのか、或いは微細運動の障害があるために指を丁寧に動かすことが苦手で文字がうまく書けないのかなどを、探っていくことができる。

つまりノートに只百文字一生懸命に書けば、(その努力自体は素晴らしいことであっても) それでこの子どもにとって、より質の高い学習が成立したということにはならないことが分かる。

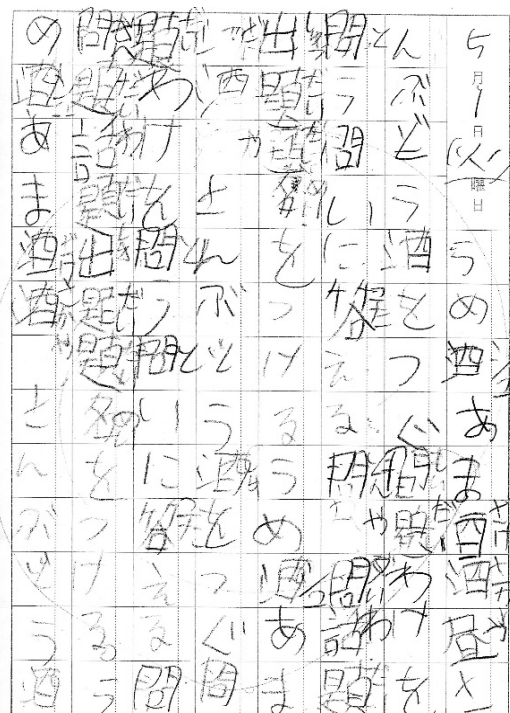
また、ある小学校で4年生の担任の先生から、次のような相談を受けたことがある。

『一人の男の子が、「視写」ができずに困っているようで黒板を写すのに四苦八苦しており、文字もなかなか整わないで困っています。』

「ところで先生、普段連絡帳などはどのようにされているのですか？」と伺ってみたところ『うちのクラスの連絡帳は原則聴写』でやっています。』とのことだった。

そのように聞き書きができるという子どもの姿を理解できているのであれば、「聴く」を活用してより分かりやすい授業を組み立てることができるはずだ。

例えば、必ず新しい単元・教材ごとに教師の範読を入れてから丁寧に授業を進めたり、クラス全体で問題文を読んだり、グループで読んだり、ペアで読んだり、意図的に読みをたくさん取り入れることで「聴覚情報」を何度も繰り返し入れていくことが有効になる。



資料1) 百字帳

1.2 作文指導

さらにここで、教室巡回指導でも先生方からよく伺う「作文」指導の難しさの理由を推察することができる。なぜなら「視写」や「聴写」のように、書くに対して対応する入力として明確な情報が無いからである。

例えば、「動物園に遠足に行ったことを作文に書きましょう」と課題が出されたとしても、子どもたちにとって経験としての自分の記憶だけが頼りになるため、「視写」や「聴写」よりもはるかに難易度は高く、出力としての「書く」がなかなか出てこないことになる。

そんな時は、「視覚情報」として、動物園の写真や絵などを提示したり、楽しかった思い出などをクラスで発表し合ったり、その子どもと動物園の様子を対話し「聴覚情報」を提供したりすることで子どもたちの「書く」をサポートすることができる。

勿論、経験や体験という入力の手がかりも無く、「書く」という出力を行うことは、さらに難易度があることは言うまでもない。

このように、子どもたちの様子や作品は、授業の改善を進めていく貴重なヒントを我々に提示してくれている。

2. 感覚統合の視点

感覚統合の視点で、子どもたちの発達を理解することは、子どもたちの実態に沿った指導・支援の道を開くことができる。

2.1 発達の木

図2の「発達の木」は、子どもたちの発達と成長を感覚統合の道すじとして捉えたものである。

子どもは、この世に誕生して生活の中で音や光や体の動きなど様々な刺激を受けて視覚や聴覚、前庭覚や固有覚などの感覚の根っこの部分が発達する。

この見えない根っこの部分に問題があると幹や枝、実は大きく育つことはない。

次に第一段階（0～2歳ごろ）では主に養育者である母親との触れ合いによる感覚刺激を受けて母親との絆を育みつつ「筋肉の張り→姿勢の保持、バランス、スムーズに目を動かす」などの力が発達する。

第二段階（～4歳ごろまで）では、自分の体の各部分がわかって動きを感じることができるようになり、自分の体をうまく操りながら、慣れない動きへつなげられるようになりこの基本的な感覚（触覚や体の動きや力の入り具合を感じとる感覚）などの発達からその情報を統合できるようになる。

第三段階（～6歳ごろまで）は、第二段階までの土台の上で、「視覚や聴覚との統合→目と手の協調運動、形や音を区別できる、目的を持った行動、言葉など」の力が発達する。

最終段階（概ね小学校段階）では、第三段階までの「感覚の統合」が基礎となり、集中力や自己をコントロールする力や学習能力や社会性などが発達する。

こうして見ていくと、土台となる根っこや幹の部分の十分な発達なくしては、自己コントロールができず、教科学習の実りも得られないということは明らかである。

これらのことから、「心と体は一つ」と言われるように、「身体知覚（ボディイメージ）の発達は、我々がこの世のこの場所この時間に生きているという情報収集・発信するための基盤となるものだ」という考えを基本とし、子どもたちの作品からプロフィールをみていく場合、同じように見える作品でも、発達年齢という視点を加味して検討する視点を大切に取り組んでいる。

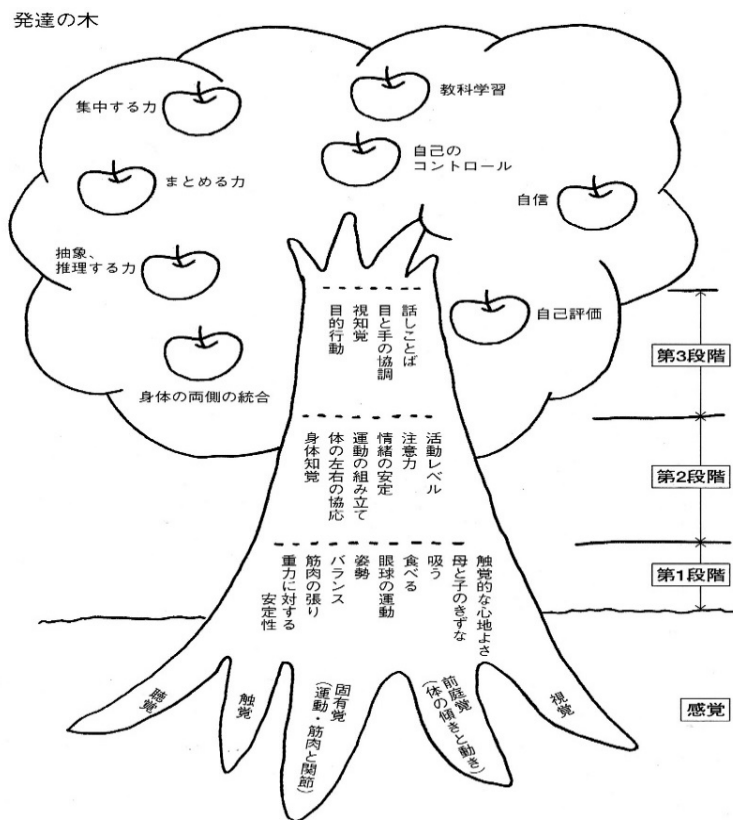


図2) 発達の木

Ⅲ 子どもたちの作品の読み取り事例

1. 0歳児の事例

次ページの写真1)と写真2)は、何歳の子どもの作品と思われるだろうか？

どちらも、0歳児保育の部屋に掲示してあった作品である。

それでは、写真1)の子どもと写真2)の子どもたちそれぞれの発達をどのように読み取ればよいのだろうか？



写真1)

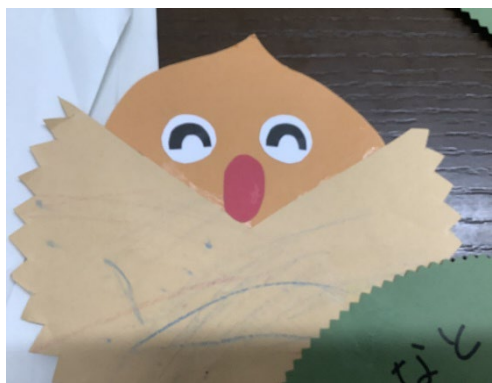


写真2)

乳幼児は、床などに座れるようになると、肩が緩み両腕が縦に上下に動く両側性の運動ができるようになる。そのため、写真1)の子どもは主に点を描くことが体の発達どおりにできていることが分かる。

次に写真2)の子どもは、肘も緩んで可動域が大きくなっており、横や斜めの線が描けるように発達してきていることが分かる。

2. 2歳児の事例

次に、下の写真3)と写真4)は2歳の子どもたち（共に男児）の作品である。



写真3)



写真4)

この二人の幼児の作品から分かる発達のプロフィールは以下のように考えられる。

写真3)の子どもは、たくさんの線が描けてエネルギーにに取り組んでいる。2歳児ということから

も、狙ったところに描くなどはまだ難しいようだが、肘も緩み何とか大きな○が描けるようになっている。また、自分の手先のコントロールはまだまだ不十分な状況であることから、衝動的な行動や多動で動き回るなどの姿が見られる可能性が高い。

写真4) の子どもは、手首も柔らかく使えるようになっており、少し見えにくい小さな閉じた○を描けるようになっている。よくコントロールされているため、穏やかに過ごすことができるので、保育には支障がない可能性は高い。一方アウトプットの量が少ないので、より多くの遊びでの経験を通して刺激を与え、発達を促してやりたい子どもでもある。

次は、写真5) 同じく2歳(女児)の作品である。

指先をコントロールして見事な頭足人を描いている。

2歳児であるにボディイメージがはっきりしてきており、この子どもなりに見えているし、大きな口でしっかりおしゃべりもできる。

実際に、お部屋の入口まで一番に飛び出してきて「こんにちわ」と元気な挨拶をしてくれた子どもでもある。

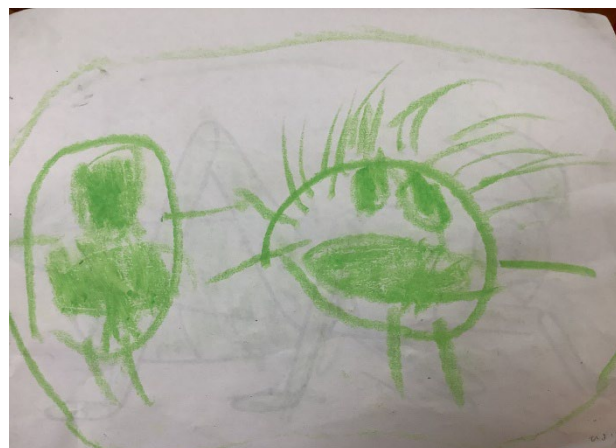


写真5)

2歳児でこれだけ、しっかりと発達していれば、保育士さんの意図も理解できるし、園での生活に困ることはないだろう。

しっかりしているだけに、心優しいリーダーとして育んでいただきたいと願う子どもだ。

このように見ていくと、生まれ月の差の影響も大きいと思われるが、2歳児であっても、これほど大きな発達の違いがあることを忘れず保育に取り組む必要があることを再確認したい。

3. 3・4歳児の事例

左下の写真6) は3歳男児の絵である。

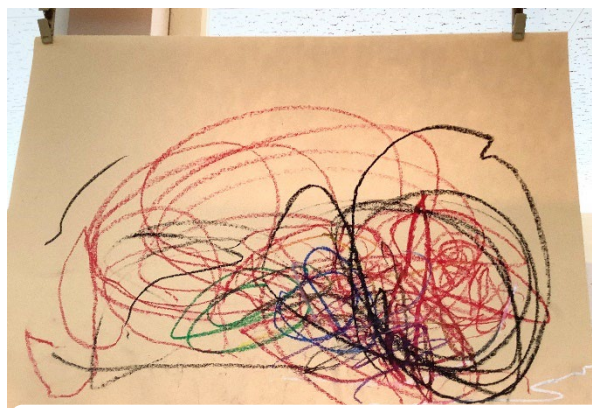


写真6)



写真7)

体が発達してきて、自由闊達にクレパスを走らせていることが感じられる。

エネルギーッシュでもあるが、「まだ自己コントロールするのが難しいですよ。」と教えてくれている。

大きな○は描けるようになっているが、小さな閉じた○がまだ描けず、人やモノらしい形がまだ表れていないことから、まだまだ幼い子どもでもあることも教えてくれる。

写真7)は同じく3歳男児の絵である。自分で意図してコントロールした線を描き、自己抑制が十分できる子どもであることが分かる。

また頭足人とさらに頭足人からさらに一歩成長した胴体のある人物も描けるようになっている。

そして、絵の中に色々な人物が登場し、何らかのストーリーが感じられることから、自分のイメージしたことを表現できる力が育ってきていることが分かる。

写真8)も同じく3歳男児の絵である。

一生懸命縄跳びにチャレンジしている自分を描いた絵であることが分かる。

衝動性というよりも、あちらこちらに注意が転動する傾向があることも感じさせる。

頭足人からさらに成長しボディイメージがはっきりしてきているのだが、小さく耳を描いていることに注目したい。

子どもたちの絵において、耳を描くことは小学校の段階まで遅れることが多く、小学校中学年くらいになっても耳を描かない子どもたちも多く存在する。

にもかかわらず、ボディイメージに耳があるということは、保育士さんの言うことも保護者の言うことも良く聞こえているということである。

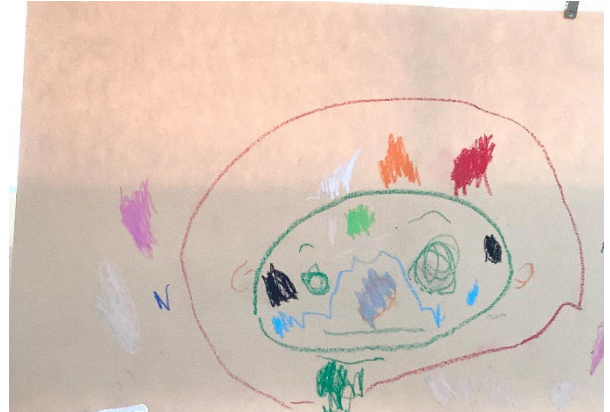


写真8)

さらに、心理学的には、「言葉の情報が心にまで届いている」ということでもある。つまり、厳しく叱られている友だちが居るとそのお説教は、叱られている本人の心には何も届いていないのに、この耳を描ける子どもたちの心にはピンピン響いてしまっているということが、起こっている可能性がある。

「心に響く」とは、言葉の裏の意味まで感じ取れるということでもあり、皮肉を言ったとしてもそれが理解できてしまうことを示している。

子どもたちにいつも厳しい口調で叱っている教師のクラスであれば、その子ども本人が直接先生から厳しく叱られている訳ではないのにも関わらず「先生が怖いから学校(園)に行きたくない…」と言い出す事案が見られることがあるが、このような発達特性の違いによるものと推察する。

写真9)は4歳女児の絵である。手先、足先、耳までちゃんと描かれており、4歳にして早くもボディイメージは、ほぼ完璧である。

しかし、ボディイメージの発達が素晴らしいと喜んでばかりはいられない。なぜなら、構図として人物が小さく、絵の上の配置も偏り委縮しているように見えるからだ。

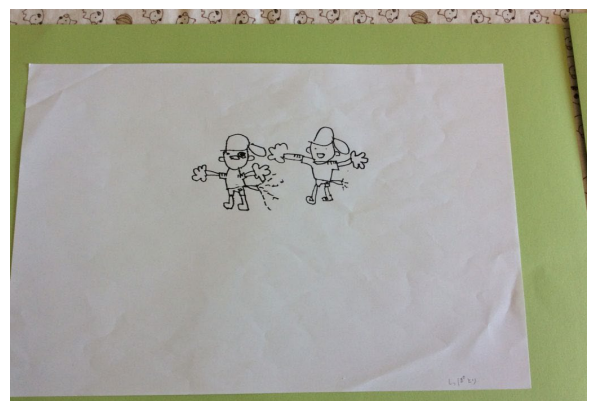


写真9)

この子どもは、この幼稚園に編入してきたばかりだったが、聴覚の発達が十分であるがために、余計に緊張が高く必要以上に不安が大きいのではと推察できた。

聴覚は「音の感覚」であり、音は時間と共に消えていく性質があることから、「時間の感覚」と密接に結びついている。つまり、未来の時間（見通し）まで意識できてしまことで、幼い本人にはそのことが大きな負担になってしまう可能性があるからだ。

それが理解できれば、如何にしてこの子どもの不安を低減し安心できる状況を作り出すことこそが、指導者側の当面の課題であることを明らかにすることができる。

そして、この女兒の半年後の絵が右の写真10)である。課題を理解し、この子どもが安心できるように職員が共通理解の上で取り組んだ成果が見事に表れている。

絵の中の表情も良く、伸び伸びと友だちと一緒に芋ほりを楽しんでいる様子が伝わってくる。

このようにして、不安の原因となる発達の状況を把握できると、より適切な教育・保育の道すじが見えてくるし、子どもたちの絵や作品を成長の目安としても活用することができる。



写真 10)

IV まとめ

最後に写真10)を見ていただきたい。これも、4歳女兒の絵である。

手先と耳はまだ描かれていないがボディイメージがしっかりと発達してきていることが分かる。

そして何より、明るく元気なエネルギーが感じられ、きっと伸びやかに園での生活を楽しんでいることを想像させてくれる。

こうして、すべての子どもたちが明るく元気に成長できる場としての学校園づくりを我々教育に関わるものは目指していきたいものだ。

さて言うまでもなく、「子ども理解」は学級づくり、学校づくりの大きな要素の一つである。



写真 11)

今回は、子どもたちの文字や絵などの作品から発達の状況や特性を読み解く基本として ITPA 理論と感覚統合の視点を紹介した。そして、その具体的な事例として、小学3年生の百字帳及び0歳～3歳までの子どもたちの絵を使って、子どもたちのプロフィールの読み取りを示した。

しかし、読み取りをすることそのものが目的ではない。本当の目的はこのような手法を通して子どもたち一人ひとりに応じた的確な関わり方ができるようになったり、指導・支援の仕方を工夫できるようになったりすることである。そしてそれが、より良い学級集団づくりに結びついてくれることを心より願っている。

参考文献

- 1) ITPA の理論とその活用—学習障害児の教育と指導のために 1975 (昭和 50 年) 旭出学園教育研究所
- 2) 読み・書き・算—難しいところはどこか (特別支援教育の基礎知識—21 世紀に生きる教師の条件)
2008 (平成 20 年) 明治図書 横山 浩之
- 3) 保育者が知っておきたい 発達が気になる子の感覚統合 2014 (平成 26 年) Gakken 保育 Books
木村 順
- 4) 学校・家庭で楽しくできる 発達の気になる子の感覚統合あそび (発達障害を考える心をつなぐ)
2015 (平成 27 年) ナツメ社 川上 康則

Abstract

Every year, the author is asked by many schools to visit their classrooms to give guidance. Children who are in trouble show their problems in various ways, such as not being able to sit in class, running out of the classroom, or immediately lashing out at their friends.

In order to find clues on how to relate to, and guide these children, the author uses observation records and works of art such as drawings and calligraphy in the classroom to understand the profile of the children and what kind of problems they are facing.

When exchanging information with the homeroom teachers after visiting their classrooms, the author was often asked by these teachers, "How can you see such things when you don't usually see them?", "How can I learn to understand?" etc.

To answer one of these questions, in Chapter II, the author introduced the ITPA theory and the perspective of sensory integration as the basic principles for reading children's profiles from pictures and letters. In addition, the author presented pictures of children from 0 to 3 years old and what can be read from them in Chapter III.

However, the purpose here is not to do the reading itself. The real purpose is to be able to interact with each child in a way that is appropriate for them, and to devise ways to guide them. The author sincerely hopes that this will lead to the creation of better classroom groups.